

## カンゴガッコウニオケルTグループケイケンノジレイ ケンキュウ : Tグループノプロセストソノコウカ

関, 文恭  
九州大学医療技術短期大学部

江向, 洋子  
東海大学医学部附属病院

<https://doi.org/10.15017/126>

---

出版情報 : 九州大学医療技術短期大学部紀要. 9, pp.11-15, 1982-03-25. 九州大学医療技術短期大学部  
バージョン :  
権利関係 :



# 看護学校における T グループ経験の事例研究

— T グループのプロセスとその効果 —

関 文 恭\* 江 向 洋 子\*\*

A Case Study of T-Group in Nursing School

— Process and Effectiveness of T-Group —

Fumiyasu Seki and Yohko Emukai

## はじめに

わが国における集中的グループ経験研究の展望が、村山ら<sup>4)</sup>によってなされている。その中で、グループ経験の効果に関しては、効果のみに焦点を合せた研究が多く、参加動機、リーダー・トレーナー等の機能、グループの形態及びプロセス等のグループ変数と効果をつなぐ研究が、極めて少ないことを指摘している。

筆者らは、<sup>5),6)</sup>Tグループのプロセスにおける発達位相、感情の測定を試みてきた。本研究は、村山らの指摘をふまえて、看護学校(3年課程)において、カリキュラムの一つとして実施されたTグループ経験のプロセスとその効果を実証的に検討することを目的とする。

## 方 法

<Tグループの対象> 某国立病院附属看護学校3年生42名を、3グループ(1グループ14名)にわけ、その1つには、Tグループ、他の2つには、エンカウンターグループが実施された。本研究では、筆者(関)がトレーナーを担当したTグループを考察の対象とする。Tグループとエンカウンターグループは、理論的強調点が若干異なるが、基本的な目的は同じである。<sup>3),7),8)</sup>詳細は、他著にゆずることにして、その基本的目的は、10人前後の小グループで生じる対人関係を通して対人感受性を高め、現実に即した自己・他者との関係を学習することにある。

<グループの特徴>①メンバーは全員女性、トレーナーのみ男性。②このグループ経験の直前に、県外の精神病院で3週間の精神科実習を終えている。③グループ経験は、全員初めてである。④14名中2名が通学、12名が寮生。⑤1名が1浪、他は現役で入学。

<スケジュール>1979年10月初旬2泊3日の日程で、表1に示すように11会合が実施された。

表1 Tグループ・スケジュール

	9:30	12:00	13:00	15:00	15:30	17:30	19:00	21:00
第1日	T <sub>1</sub>	昼食	T <sub>2</sub>	休憩	T <sub>3</sub>	夕食	T <sub>4</sub>	
第2日	T <sub>5</sub>	昼食	T <sub>6</sub>	休憩	T <sub>7</sub>	夕食	T <sub>8</sub>	
第3日	T <sub>9</sub>	昼食	T <sub>10</sub>	休憩	T <sub>11</sub>			

<グループ効果の測定> 各会合の終了直後に、感想文を自由に記述させた。全日程が終了して3日後にTグループ全体の感想を提出させた。翌年3月の卒業式の前日に、3年間の学校生活の感想というテーマで感想文の提出を求めた。

## 結 果

<グループ・プロセス>

T<sub>1</sub>(第1日目) 9:30-12:00

トレーナーが、Tグループの進め方についての説明を行なう。「今から2泊3日の予定で、私もふくめて15名でグループを進めていきます。目的は、お互いが真の出会いの体験をして

\*九州大学医療技術短期大学部

\*\*東海大学医学部附属病院

感受性を高めるということですが、今ここでのことを中心に話しを進めていきたいと思っています。私はトレーナーですけれども、メンバーの一人でもあります。皆さんと同じレベルで話しに加わりたと思っています。では、はじめましょう。」その後、自己紹介をやり、沈黙の連続にとまどいながら2時間半のグループを終えた。会合後の感想文から、その会合の雰囲気伝えてあるものを抜粋して列記してみる。(A～Nはメンバーを示す)

A：「沈黙はとても苦痛である。」 C：「もっとくつろいだ雰囲気がほしい。」 L：「話題はいっぱいありそうだが、いざ話すとなるとなかなかうかんでこなかった。」

T<sub>2</sub> 13：00－15：00

この会合の話題は、将来の設計、結婚について、看護婦をめざした動機などであった。身近なことなので活潑に話しが出る。

B：「トレーナーからこれが力を注いで討議したい問題であったかという指摘があったけど、とてもいい議題であったと思うのですが…。」 C：「テーマは興味があったが、表面的すぎて物足りなさを感じた。」 E：「まだまだ皆が本音を出していない感じ。どこかとりつくろった所があるように自他ともに感じています。」 H：「話さなければならないから話しをしているという面が強く、自分が話したくて話しをしているのではないと思う。」

T<sub>3</sub> 15：30－17：30

前回までは、椅子に腰かけての話し合いであったが、今回は毛布を床に敷き、座ってくつろいだ格好での会合であった。自分の生い立ちが主な話題であった。

D：「今回は自発的な意見が多かったようです。しかし本当にこれでよいのか、これで自分を知ることができるのかと思う気持ちをもち続けていました。」 I：「ふと気がつくとなんか話をしていない人がいて、自分には楽しくてもあの人はどうかなと少し気になりました。」 J：「昔を思い出してなつかしかったが思い出したくないものまで思い出してしまった。」 K：「すわり方でこんなに心がなごむなど、びっくりです。」

N：「昔のことを思い出し、素直な頃の自分に少しもどった気がする。」

T<sub>4</sub> 19：00－21：00

第1日目最後の会合。トレーナーが、今、ここで (here and now)の問題についてももう一度考えてみるように介入する。

E：「今日の最後になって、はじめて満足のいくものができました。途中、夕食、入浴と他の行動があったことと、くつろぐ時間があったことなどから、『よし今度は、勇気を出して自分が思っていることを、感じていることをそのまま言うぞ』と決心したため、積極的に参加することができました。」 G：「今回、皆の中に気づきがあったように思う。重いという感じがある。もっと軽い雰囲気にならないだろうか。」 L：「今回、この場この人数で行う目的、どうすればよいのかさっぱりわからなくなってしまいました。何をいえばよいのか、考えれば考えるほどわからない。」 N：「グループに対する不可解さが幾分とれた。自分の本当の気持ちを少しずつではあるが、皆に表出できるようになった気がする。今回、はじめてもうすこし時間をかけて話したいと思った（今までは早く終ればよいがとばかり思っていた）。」

T<sub>5</sub> (第2日目) 9：30－12：00

前半は話題があちこちに飛んで、沈黙が続くことが多かったが、メンバーNの「もっと素直に自分の感じていることを言おうではないか」という発言がきっかけとなって急速にグループの動きが発展した。here and nowがメンバーに理解されたようである。A：「印象に残ったことは、今自分が思っていることを口に出して言うことが大切であるということです。」 D：「今まで何か違うと思いつつ、その違いをNさんが言ってくれた。いいことを言うなあと感じた。」 J：「他からみた自分、自分をどう思っているか、言われることも怖いし、言うことも怖い。」 N：「はじめは皆にすごく不満であった。なぜ発言しないのか、一体何を考えているのか、なぜもっと協力的でないのか。みんな素直な気持ちをもっと出すべきだ。……これからの見通しがたつてうれしい。」

T<sub>6</sub> 13:00-15:00

メンバーIが、メンバーJの態度が気に入らないことを素直に述べる。Jは、自分がそのようにうけとられていることは意外であると反論し、2人の間で緊迫したやりとりが続く。感想文は、緊張のせいか全員短くなっている。

B:「人の本音を聴くことは大変素晴らしい。」

C:「自分をふりかえるいい機会であった。」

H:「やっと自分達の意とする話しができたという感じです。本当に人を理解することはむずかしいことだと感じた。」I:「Jさんのことが何かほーっとしていたものが形をもったような気がした。」J:「何だか言葉で言えないそんな気分です。私って、まだまだ損な感じもうけます。」

T<sub>7</sub> 15:30-17:30

メンバーJについて、I以外のメンバーから、集中的に意見が出る。Jは自分の生い立ちから涙ながらに話しをはじめ。いずれも弁明に終始し、メンバーの間に不満な様子がかげえる。C:「1人の人に対して色々な見方があるのだなあと感じた。」G:「言葉で語りつくせないことがあって、どう表現すればいいのかとてもむずかしいと思った。」J:「意外、意外。何だか自分も何もかもわからなくなってきたような気がする。」M:「疲れがグループに出てきた感じ。意見をいわない人が出てきた。」N:「人の発言にすぐ疑問を感じる。自分でもなぜかわからない。」

T<sub>8</sub> 19:00-21:00

第2日目最後の会合。関心が他のメンバー(F, I, N)に移り、互いに素直に意見を述べあう。感想文に何もかかないメンバーが散見される。

F:「自分のことをみんな知りたいと思ってくれる気持ちがかうれしかった。」H:「本当に感じることを自分なりに人に返すことができうれしいと思う。」I:「半分、重荷をおろしたような気持ちです。」K:「I, Nさんがわかって、また好きになれそうです。」

T<sub>9</sub> ~ T<sub>11</sub> (第3日目)

昨日にひきつづき、メンバー全員について自

分が、今感じていること、今まで思っていたことなど素直な意見の交換が行なわれた。T<sub>11</sub>の後半でトレーナーが、各メンバーに感じたことを述べたのちに、このグループの流れを振り返ってグループを終了した。

A:「最後に自分の言いたいことを言えたようだ。少し成長した自分を感じた。」B:「今は言葉で何とも言えないような感激というか、本当に人間て素晴らしいなあと感じ涙する思いです。」

C:「3日間大変有意義でした。15人は多すぎるのでは。」E:「やっと本当のことを出すことができ、『今』を大切にしなければとつくづく思う。」G:「人っていとおしいものだなあと感じた。」H:「自分をみつめることができよかった。」I:「今があってはじめてこのグループの意義を感じます。人の存在を本当に嬉しく思います。」J:「終わった、そしてまた何かが始まる。そんな気がする。」L:「自分が今まで気づかなかった点を指摘され、みんなに感謝している。」M:「Jさんのことが気になる。今後おちこんでいかにようにみつめてあげたい。」N:「友だちっていいなあ。」

<グループ直後と卒業前の感想文の比較>

グループ直後の感想文の内容を、Tグループの効果をみとめるもの(+), はっきりしないもの(?)に分類した。卒業前の感想文には学校生活のすべてが含まれていたが、寮生活、実習、Tグループに大別される。各々について、その効果をみとめるもの(+), はっきりしないもの(?)に分類した。いずれにも否定的な感想はみられなかった。結果は表2に示す。空欄は記述がなかったものである。

Tグループ終了直後に効果をみとめるもの12名, はっきりしないもの2名, 卒業前においてTグループの効果をみとめるもの9名, はっきりしないもの1名であった。実習、寮生活の効果をみとめるものは、それぞれ7名, 6名であった。

表2 グループ経験効果の比較

メンバー	終了後	6ヶ月経過後		
		Tグループ	実習	寮生活
A	+	+	+	
B	+		+	
C	+	+		+
D	+	+	+	+
E	+			+
F	?	+		
G	+		+	
H	+	+	+	
I	+	+		
J	?	+		
K	+	?		+
L	+	+	+	
M	+			+
N	+	+	+	+
計	+12 ? 2	+9 ? 1	+7	+6

+：効果を認めるもの ?：明確でないもの  
空欄：記述なし

### 考 察

まずTグループのプロセスの考察を試みる。T<sub>1</sub>では、トレーナーの導入によって、話題を決めようとするが、うまく決まらずにトレーナーに依存しようとする動きがみられた。T<sub>2</sub>においては、将来設計、結婚、看護婦というテーマであったので、話しはずんだが、逃避的な動きであったと考えられる。トレーナーの介入に抵抗を示したり、無視したりする動きもみられた。それにともなって、もっと自分のことを本音で言おうという発言もみられ、自己露呈の意識が表面に出はじめる。T<sub>3</sub>では、毛布を床に敷いて座ることになって緊張感がとれた。椅子に腰かけて円座で話しをするということは、頭から足もとまで全身をむき出しにしているということであり、それからくる緊張感から防衛的な態度になりやすいと考えられる。座ることによって防衛的態度の解消に効果があったといえよう。以後T<sub>11</sub>まで座って会合が続けられた。

このT<sub>1</sub>からT<sub>3</sub>までが、Bradford<sup>2)</sup>のいわゆる防衛的態度の段階に相当すると考察される。ト

レーナーへの依存、攻撃も効果をあげず、メンバー自身で窮地を打開するための模索が続き、結局皆が素直に感じたことを述べあうことが最良であることに気づき、次のグループ形成への段階へと進展していく。

T<sub>4</sub>の冒頭にトレーナーより here and now をもう一度考えてみようという提案があり、メンバーにとまどいがみられたが、やがて自己露呈の意識が明確になってきた。

第2日目に入り、T<sub>5</sub>の前半は昨夜のことが忘れられたようなしっくりしない雰囲気であったが、メンバーNが、素直に話していないことを鋭く指摘し、互いにもっと協力しあう必要性を認識しグループが急速に展開していった。

このT<sub>4</sub>、T<sub>5</sub>がグループ形成の段階に相当するといえよう。トレーナーもメンバーの一員であること、互いにもっと素直な感じを述べあうことが再認識されて、相互に啓発する気運が醸成されてきている。

T<sub>6</sub>～T<sub>11</sub>までは、相互啓発の段階に相当していると考察される。まずメンバーI、Jから相互に自己露呈が行なわれ、ついでメンバー全員に推移していった。感想文にその経過は明らかなように、日常はとて言えないことでも素直に述べあい、それを互いにうけとめあうという状況である。

このグループは、Tグループの発達段階を順調に経過しており、Tグループの目的の一つである対人感受性を高めることに成功しているといえよう。

Tグループの発達段階を順調に経過した要因の一つにこのグループの直前に3週間の精神科実習を経験していることが考えられる。精神病患者と意思疎通ができなくて困った経験が、「我々は自由に会話ができるのにどうして互いを本当に理解できないのであろうか」という問題意識を高め、グループのプロセスに好影響を与えたと考察される。したがって、3年間のカリキュラムにおいて、Tグループの設定時期は適切であったといえよう。

ついでTグループの効果性の考察に移る。本研究においては、効果測定をいわゆる質問紙によらず自由記述によって求めた。質問紙においては、

いわゆる社会的望ましさの方向への歪みが生じやすいので、できるだけそれを除去するために自由な感想文によって効果測定を行なった。

表2によれば、Tグループ終了直後、その効果を認めたもの12名、明確でないもの2名、6ヶ月後に効果を認めたもの9名、明確でないもの1名であった。Tグループが3年間のカリキュラムの中で、わずか3日間という短時日であったことを考慮すれば、Tグループ終了後6ヶ月経過して、その効果を認めているものが14名中9名であったこと、寮生活や実習よりもTグループの効果を認めるものの方が多いことは、Tグループの効果が強く、かつ持続性があると考察される。

安部<sup>1)</sup>は、看護学校におけるグループ経験の意義として 1) 自発性の経験 2) 看護婦としてのアイデンティティの試し 3) 友だち関係のみなおしと親密度の増大 4) おとなになるための条件のとり入れをあげている。筆者らは安部の指摘した4点にもう一点つけ加えたい。それはTグループの基本的目的の一つである感受性を高めるということである。看護婦にとって患者のneedを適確に把握することはきわめて重要なことである。その技法の訓練にTグループ経験は最も適したものであると考えられる。

今回のグループは、トレーナーを含めて15名で構成されたが、グループの適正規模とされている10名以内からすると5名もオーバーしている。大きなグループでは、トレーナーがグループの動きやメンバーの感情の動きを把握することが困難になりがちである。トレーナーの確保ができるならば、10名程度でグループが構成されることが望ましいであろう。

## 要 約

本研究の目的は、看護学校においてカリキュラムの一つとして実施されたTグループ経験のプロセスとその効果性を実証的に検討することであった。得られた主な結果は次の通りである。

1. Tグループのプロセスは、通常の発達段階を経過し、初期の目的を達成した。その要因の一つとして、Tグループの設定時期が適切であ

ったことが考えられる。

2. Tグループの効果は、6ヶ月経過した後も持続していた。

3. 看護学生が、グループ経験することの意義について考察を加えた。

## 引用文献

- 1) 安部恒久：看護学校におけるグループ経験の意義。日本心理学会第44回大会発表論文集p. 641, 1980.
- 2) Bradford, L. P. : Membership and the learning process. In Bradford, L. P., et al (Ed.), T - group theory and laboratory method. New York : John Wiley, 1964.
- 3) 村山正治編：エンカウンター・グループ。福村出版, 1977
- 4) 村山正治, 野島一彦, 安部恒久, 岩井力：日本における集中的グループ経験研究の展望。実験社会心理学研究, 18, 2, 139 - 152, 1979.
- 5) 関文恭, 吉田道雄, 杉万俊夫：討議集団の発達過程の実証的研究 (I) - Tグループの位相の測定 - 九大医短部紀要, 3, 49 - 58, 1975
- 6) 関文恭, 吉田道雄：討議集団の発達過程の実証的研究 (II) - Tグループにおける感情の測定 - 九大医短部紀要, 4, 37 - 41, 1976
- 7) 関計夫：感受性訓練, 誠信書房, 1965
- 8) 関計夫：続・感受性訓練, 誠信書房, 1977